

来^{らい}ぶ^ぶら^らり^り ㊦

今年の「合いことば」

図書館長 波多野里望

(法学部教授・国際法)

学生は、いろいろな物差しによって、
ふたつのカテゴリーに分けられる。
男と女、現役と浪人、
クラブに入る人と入らない人、
そして、図書館に来る人と来ない人。

* * *

図書館に寄りつかない学生に、
その理由を尋ねてみた。

「暗い」、「重苦しい」、「威圧感がある」……
いろいろな答えが返ってきたが
その中で最も多数を占めたのは、
「読みたいと思う本は置いてないだろうから」
という答えであった。
ひとことで言えば、「食わず嫌^{きん}い」なのである。
しかし、これは、認識不足もはなはだしい。
たしかに、図書館には、
ポパイもなければ、アンアンもない。
ジャンプやマーガレットも見つからないだろう。
だけど、だからといって、
辞典や教科書のような、
カタイ本しか置いてないわけではない。
去年新設されたベスト・セラーズ・コーナーには、
赤川次郎もあれば、西村京太郎もある。
新井素子だって、栗本薫だって、
書架にちゃんと並んでいる。
まあ、だまされたと思って、
一度は図書館に足を運んでみたまえ。

* * *

せっかく来てくれたのに、
「ほしい本が、やっぱりなかった」だって？
それは申しわけない。

そんな時は、カウンターに申し出てくれたまえ。
あんまりヘンな本でなければ、
他の大学や国会図書館にないかどうか、
すぐに問い合わせてくれるはずだ。
そして、もし「ある」ことがわかれば、
必要な部分だけコピーしてもらうこともできる。
もちろん、コピー代と郵送料は諸君の負担だが…。

* * *

「アメリカの政治史について調べたい」
「本のタイトルだけしかわからないんだけど…」
知りたいこと、困ったことがあったら、
やっぱり、カウンターに行くことだ。
「たちどころに」といく時もいかない時もあるが、
とにかく、「参考係」というベテランが、
全力をつくして、答えを探してくれる。
そのうえ、図書館では、
いろいろなテーマで、セミナーも開いている。
「百科事典の使い方」、「新聞記事の見つけ方」、
「卒論に必要な外国の文献の探し方」から、
さらには、「和綴じ本の仕立て方」まで。

* * *

そして、読書に疲れたら、
ビデオ・コーナーで憩いのひとときを /
マイケル・ジャクソンの「スリラー」
松田聖子の「武道館ライブ」
もちろん、時には、
「カサブランカ」といった往年の名画も……。

* * *

「授業のない時は、図書館へ行こう /」
それを、今年の「合いことば」にしたい。

消えることのない時を

「朝日新聞」投書欄で、16歳の少年が「大人たちは、ロックをちっともわかってくれない」と嘆いていた。数日すると、今度は60歳のロック大好き老人を始めとして、数人の大人たちが「自分の周辺だけをみて、決めつけてはいけない」と、この少年をたしなめる投書が出た。「みんなやっている」「誰もやっていない」という言い方をよく耳にする。自分の限られた周辺やテレビ画面だけを見て、「みんな」と言う。こういう判断の飛躍が若者の特徴だ、と言ってしまえばそれまでだが、どきどきするような、人との出会い、本との出会い、そして物との出会いを、どれだけ経験してきたか、そういう積み重ねが「いろいろな人たちがいる」ということに、思いが及ぶかどうかを分けているのかも知れない。

息子もロックを好んで聞いている。深夜近くなって、テレビでやるので、私も何気なく聞いている内に、あまり抵抗がなくなってきた。テレビではロックばかりではないし、ヒット・チャート上位に登場するのは、やはりメロディアスなものが多から、あまりうるさいとも思わない。今では、ハワード・ジョーンズのレコードを買えと息子に勧めてみたり、「カルチャー・クラブのあの明るさはモーツァルトに通じる」などと妙なことを考えたりする。

終日家にいる日曜日など、午後になると座り疲れて散歩に出ることが多い。先日ふと立ちよった

レコード店で、黒地に“Somethin' Else”と文字だけ印刷されたブルー・ノート・レーベルのジャケットを見つけた。二十数年という時間が、その瞬間に逆行してしまった。新宿の喫茶店「木馬」のうす暗いよどみの中を、マイルス・デイビスのトランペットが複雑な曲線を描いて走り始めると、ハンク・ジョーンズのピアノが、それにまつわりつくようにして時には乱れる。キャノンボール・アダレイのリード・アルバムなのに、マイルスが縦横に遊び、アート・ブレイキーがメンバーをやさしく包み込んでゆく。

あの頃、バド・パウエルやセロニアス・モンクを聞いてはいたが、ジャズ狂いというわけではなかった。だが、このレコードで私は強烈な個性の美しい競合を見たように思った。相手の個性を認めあい、助け合いながら、とき至れば“俺だ”と主張することができる、そんなやさしさに満ちた世界が広がっていった。その時ふいに、知識としてしかとらえていなかった「自由」というものの一端を覗いたような気さえした。

月日は、ミラポ橋の下を、セーヌの水と共に流れてゆくものだけれど、私の杭に引っかかったこの「消えることのない時間」を大切なものだと思うのは、悔恨に満ちた日々を、いくらかでも彩ってくれているからなのだろう。そういう時を求めて、私は今も彷徨う。

(事務長 佐野 眞)

オランダ人がフランス語で書いて、阿姆斯特ダムのパリ書店から1933年に出版した本。これが私の求めるややこしい本でした。3行に及ぶ長たらしいタイトルは真面目さに溢れて、冗談の通じない人だろうな、とクラーイ気持ちになるのです。でも、この本いつもチラチラと私の回りで見え隠れ。

一冊の古い本の話

どうにも気になる。是非ともお目にかかりたい。そこで、お知恵拝借、と参考室のKさんに。高々100ページの本ですから全ページのコピーを。たとえ遙かな空の下、異国の苔むす図書館なりと、伝えて下せえこの恋心(?)、とお頼

み申してはやひと月。ありました、ありました。しかも日本の大学にありました。あとはもう指図通りに手続きを済ませて、首を長〜くして待っていればいいのです。花便り。これ、僕の初体験。

現在、図書館は文献探索のための大学間相互協力システムを整備しつつあります。古い専門書や雑誌で入手困難な場合、是非とも参考室を訪ねるべきです。ただし、求める書籍、雑誌の正確なデータは自分で調べること。

(史学専攻 博士前 金尾健美)

「ごきげんよう」に、 ごきげんよう

女子高等科・中等科図書室から、大学図書館に転勤して、10ヶ月たった。人にも、仕事にも慣れ、今やルンルン気分で仕事をこなしている。と大見栄をきりたいところだが、洋書整理という仕事は、一筋縄ではいかない。聞くところによると、一人前になるまでに5年かかるという。私などは、日頃の不勉強と、頭の悪さと、寄る年並で、倍以上かかるかもしれない。尻尾を巻いても女子部にもどれるわけではなし、せいぜい尻尾を出さないよう気をつけるほかない、と覚悟を決めた。

長い間、女子部にお世話になったせいか、転勤してこの方、何かと、戸惑うことが多い。まず第1に、男子学生がいるという点。今まで、短大の学生を含めると、2400人も女性を相手にしてきた。おまけに、父親と夫以外、男性を深く観察したこともない。どう接していいか見当がつかない。ところが、閲覧当番などで、数多くの男子学生に会ってみると、意外にも、礼儀正しく、心やさしいことを知らされた。

学年末試験の時期、1階の開架図書室だけで、300近い貸出冊数になる時がある。行列になり、貸出

しに手間どったことがあった。「おまたせして…」と、詫びると、「ありがとうございます。がんばって下さい」という太い声が、返ってきた。うれしかった。

第2に戸惑ったことは、「ごきげんよう」

という言葉。使い慣れてしまうと、これは大変便利で、つい口に出る。転勤してまもないころ、女子部の生徒達が会いに来てくれた。お互い感激のあまり、「ごきげんよう!!」と、叫んでしまったことがある。まわりにいた学生達が、びっくりして振り返った。女子部では、出会った時、別れる時など、日がな一日、この挨拶言葉を使っているけれど、特殊な言葉なのだと気づいた。

新しい水に慣れるためにも、女子部と、「ごきげんよう」という美しい言葉に対して、しばしのお別れをせずばなるまい。15年間お世話になった感謝の思いをこめて、女子部の皆様に、そして「ごきげんよう」に、ごきげんよう。

(洋書係 中村清子)



みなさんは、「グリム」という名前を知っていますね。『人魚姫』などを書いたアンデルセンと同じように、「童

話作家」と思っている人がたくさんいるのではないですか。『白雪姫』『赤ずきん』などで有名な「グリム童話」は、実は、ヤーコブとヴィルヘルムという二人の兄弟が、民話や古くからの口伝えなどを集めたものなのです。彼らは本来、言語学者であり、文献学者だったのです。

ところで、兄ヤーコブには図書館員時代があったそうで、高橋健二著『グリム兄弟・童話と生涯』(小学館 1984)の中に、彼のこんな言葉が引かれていました。「書物の整理やカード作成は、無味乾燥で骨がおれた」「カタログを全部書き写すように命じられ、その機械的な仕事に1年半も、うめくように辛い思いをした」と。これを読んだとたん、今から160年以上も前の方が、イツキに「身近な人」と感じられるようになりました。

グリム『ドイツ語辞典』

今度、図書館の参考室に入つた『Deutsches Wörterbuch』(『ドイツ語辞典』)は、このグリム兄弟が編纂したも

のなのです(もつとも、兄弟が直接編纂に関係したのは、死ぬまでの20余年間だそうですが)。この辞典は全16巻ですが、編纂に着手してから第1巻が出るまでに14年も費し、なんと123年もかけて、1961年に完成しました。さらに、2005年に改訂版完成予定というのですから、ドイツ人の息の長さにはまったく頭が下ります。

グリム兄弟が、この辞典を編纂することになったのは、ゲッティンゲン大学の教授だった二人が憲法論争に巻き込まれて大学を追放された時、彼らの才能を惜しんだ人たちが、二人を救済するために計画を立てたからなのだそうです。

もつと詳しいことを知りたい方は、高橋健二著の前掲書(請求記号940.28-78)を読んで下さい。

(洋書係 真下 勇)

参考室あれこれ

参考室では、みなさんが研究・調査を進めていく上で必要な資料・情報を入手できるように個別的に相談に応じています。

必要な資料・情報を探しているとき……

資料が図書館にないとき……

目録・書誌の使い方がわからないとき……

どうぞ気軽に声をかけて下さい。

高校生の時、みなさんは読みたい本を直接手に取って選ぶことができました。大学でこの方法が使えるのは、開架図書室と参考室にある本を探す時だけです。探している本がそこになかったら？ カードを引かなくてはなりません。カードを引けば、全学の図書の所在がわかるの

で、活用すれば、あなたの情報量は豊かになること間違いありません。しかし、はじめてカードに接してとまどうこともあるでしょう。書名があいまいである。著者名のスペルがわからない。南北問題に関する資料を探しているが、分類番号がわからない。……係員に相談しましょう。

参考室には、辞書・百科事典・専門事典・便覧・図鑑・年表・年鑑・地図・地名事典・人名事典・文献目録・索引等があります。みなさんに上手に使っていただくとともに、係員もそれらを使って文献・情報を探すお手伝いをします。ただし、複数の資料の中からどれを選択するかを決めるのも、問題に対する解答を見つけ出すのも、あなた自身であることを忘れないで下さい。(参考係 久保田安子)

好評「来ぶらり」シリーズ—ビデオとセミナー—

○「来ぶらりビデオ」

今年度は、毎週火曜日の3時からと、月1度、土曜日の午後1時からの放映を予定している。内容は火曜日は、いくぶん「かため」に(芸術劇場「ドン・キホーテ」etc)、土曜日は、ウィークエンドの午後を楽しく、と、肩の凝らない娯楽中心に(「真夏の夜のジャズ」etc)、それぞれ工夫をこらしている。ビデオデッキも、今までのVHSに加えベータをもう1台購入することが決定した。

○「来ぶらりセミナー」

今年度の予定は次のとおり。

第1回：5月18日(土)「資料の探し方—その第一歩」第2回：6月8日(土)「学术论文の入手法—文献目録の活用」第3回：10月中旬「外国文献入門—文献目録の読み方」第4回：11月中旬「百科事典の使い方」番外篇〈製本教室〉：12月上旬「文庫本を特装本につくりかえる」

お知らせ

○新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。図書館の今年の「合いことば」は、「授業のない時は、図書館へ行こう！」—そこで、図書館のお得な利用法、あれこれ。

開館時間—8:50~18:30。夏休み・春休み期間中も開いています。

借りられる冊数・期間—3冊、2週間。ただし、予約者がいなければ2回まで延長可能。長期休暇中は、冊数・期間ともに枠が広がります。

コピーをしたい時—コイン式でセルフ・サービス。500円玉と紙幣は使用できません。図書館は両替

をしませんので、こまかいお金のご用意を。

リクエストサービス—利用したい本が図書館になかったら、備付けの用紙に記入して下さい。できるだけ御希望に沿うようにしています。

図書館でコーヒー・ブレイクを—屋上サンルームに飲物の販売機を設置しました。ご利用下さい。

○大学院生を対象とする「図書館オリエンテーション」を、次の日時に実施します。

4月15日(月) 14:00~15:00

当日来られない方は、都合のよい日に、2階カウンターに来て下さい。

来ぶらり No.9 1985年4月1日発行

発行責任者：波多野里望 編集委員：種田昭平 中山高二

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221